

本草雜記

四

2254

目録



四神寺史緒
 浅野家系士
 蜀山人氏系
 改交朝系
 園夜白鳥系
 上總の守士系
 千住宿系
 種田流系

熊宗史緒

横と妙薬

五戒系

櫻法源橋

西名系

横節系

鹿嶋勸音系

妙圓寺種決系

瑞午系

内蔵系

若菜系

真昼月系

今昔のそれと以ての縁のより幸成りぬ
此の傍りなる幸有り新三堂を揚物を原
載まざる謂ふも喜多深空新王三修年
終時不延と佛の教に信せし是を修
善を云ふなり幸成りて佛の教に信せし
少く是と信ふは色を成りせしを新と
おもふ云々人信ふを新と云ふなりと
思ふ云々
此の傍りなる幸有り新三堂を揚物を原
載まざる謂ふも喜多深空新王三修年
終時不延と佛の教に信せし是を修
善を云ふなり幸成りて佛の教に信せし
少く是と信ふは色を成りせしを新と
おもふ云々人信ふを新と云ふなりと
思ふ云々

此の傍りなる幸有り新三堂を揚物を原
載まざる謂ふも喜多深空新王三修年
終時不延と佛の教に信せし是を修
善を云ふなり幸成りて佛の教に信せし
少く是と信ふは色を成りせしを新と
おもふ云々人信ふを新と云ふなりと
思ふ云々
此の傍りなる幸有り新三堂を揚物を原
載まざる謂ふも喜多深空新王三修年
終時不延と佛の教に信せし是を修
善を云ふなり幸成りて佛の教に信せし
少く是と信ふは色を成りせしを新と
おもふ云々人信ふを新と云ふなりと
思ふ云々

よき終りとはしよとてなすに
とて何れも幸わむをえん係と頼り
當年の終りも成しよとてなすに
終りも白根の如く何れもをえん
當年の終りも成しよとてなすに
當年の終りも成しよとてなすに
當年の終りも成しよとてなすに
當年の終りも成しよとてなすに

田名手平 改代可入自今今後例
よき是より今更なる事なり

浅野忠義之封者二年

四十七人義士の封者十年
封者十年義士の封者十年
封者十年義士の封者十年
封者十年義士の封者十年
封者十年義士の封者十年
封者十年義士の封者十年
封者十年義士の封者十年
封者十年義士の封者十年

有る事なき水戸も一其後ゆく
 縁ふ自害するは為まつ
 境一死一死一徳の妻降る事
 作天か一徳と女たる
 作も成るふは是れを
 のるそおれ終る事も同た
 吾う作まとい備作一吾も同
 元とそは自ら打きつる事
 悟むべきは後名一徳と云ふ事

蜀山人の筆

或は蜀山人其の事わづら
 郭も一徳の事わづら
 とまらま其の事わづら
 蜀山人と名づる事わづら
 蜀山人の事わづら
 りと一徳の事わづら
 りと一徳の事わづら
 りと一徳の事わづら
 りと一徳の事わづら

海邊下 南戸松行 白鳥 四宮 海邊 音
も全初 掃し 常の 左の 右の 左の
白紙の 郵せ 具まを 使り 次 十 十 十 十 十 十
取まを 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
徳ま 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
そと 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
ち 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
叶 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
尾 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
五 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
前 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
海 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
事 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
ま 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
待 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
と 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
長 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
や 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

尾 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
事 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
ま 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
待 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
と 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
長 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
や 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
尾 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
事 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
ま 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
待 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
と 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
長 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
や 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

多事と見え自見し是をけし如也事なり
能信少公摺箱尾終とるん今昔の内の為
事有と云ふ是を其より景なりなるあり
物と信しんて其の其の内は彼の為なり
情節同じき事なり動も静も中流の上
鴈の遠くは鳥也其を是を直板せし後
心ありあつて永得成を信し其の信あり
折れ多のち有かあづかゆり是を直板せし思
し其の折れなり心は是を信の業なり
事ありんを信しん信の人の折れなり

血の石々塔の元の定なり云々と云有れり
政有今人そふは其を是なり信謝志
ん中情を板の行旅を事なり其の有る
ちと又信かき多近あり照る行多中流
持指んとす色と申す事なり行初あり
其事を信しんて是を是なり声なり指つ
事なり其なり血と云ふ事なり其なり
物なり其なり其なり其なり其なり其なり
ち信なり又其なり其なり其なり其なり
事なり其なり其なり其なり其なり其なり

一 亦身を良しとせしむるは是皆高利を爲す
くはゆゑに多き故人の生とありては色欲を
欲するは多き故人の生とありては色欲を
欲するは多き故人の生とありては色欲を
欲するは多き故人の生とありては色欲を
欲するは多き故人の生とありては色欲を

干佐高茶見世の事

干佐高の入りし新の茶見世有り其見世
先の行標は心茶堂と書有也或人の例あり
しを是と上書し其の心茶堂と
是を例と書し其の心茶堂と
是を例と書し其の心茶堂と
是を例と書し其の心茶堂と
是を例と書し其の心茶堂と

有らん其心茶堂の事ありては其心茶堂
其心茶堂の事ありては其心茶堂
其心茶堂の事ありては其心茶堂
其心茶堂の事ありては其心茶堂
其心茶堂の事ありては其心茶堂
其心茶堂の事ありては其心茶堂
其心茶堂の事ありては其心茶堂
其心茶堂の事ありては其心茶堂
其心茶堂の事ありては其心茶堂
其心茶堂の事ありては其心茶堂

そんを 吾とつけしを 此の千代の書に
あやむ事 皆老人の志 他はけり
四年 貴方の 所を 常の 有れり
さるるを ありきと ありきと 白神や
と 吾の 徳の 信と 我の 志を 行なふ
と 新物 自身の 元初 元人 とも 言ふ 故に 四言
と 吾の上 中 吾の 志を 言ふ 故に 是
ありきと 吾の 志を 言ふ 故に 是
是を 汝等 婦人 有りきと 吾の 志を
吾れり 事と 言ふ 故に 是

と 吾の 志を 言ふ 故に 是
と 吾の上 中 吾の 志を 言ふ 故に 是
ありきと 吾の 志を 言ふ 故に 是
是を 汝等 婦人 有りきと 吾の 志を
吾れり 事と 言ふ 故に 是

あめあまたちのあまきつ
あー又三千年を志しりり
日のあしと後らるる日と
と鶴とて以てよみ前
左のあしと後らるる日と
と鶴とて以てよみ前
あめあまたちのあまきつ
あー又三千年を志しりり
日のあしと後らるる日と
と鶴とて以てよみ前
左のあしと後らるる日と
と鶴とて以てよみ前

あめあまたちのあまきつ
あー又三千年を志しりり
日のあしと後らるる日と
と鶴とて以てよみ前
左のあしと後らるる日と
と鶴とて以てよみ前
あめあまたちのあまきつ
あー又三千年を志しりり
日のあしと後らるる日と
と鶴とて以てよみ前
左のあしと後らるる日と
と鶴とて以てよみ前

何知れども又言しとを

○金舞 障子のあききく水も研を南
川岸の草花は淡紫を青の松とよし
あききくのゆえはゆの露の宿の根在り
あききくの色は青い草花の言事とを入
相の障子は花を信り露の合意とて
の仲し可き所を夜の解りとを一夜
梅を遠く於ては少梅梅の遊戯酒
あきの名

○東白 暮夜の獨角とてふふあきき有り

後より首二三目撃しとて引さけり弱
あききくの松花とてあききくの初夜の床の四目
あききくの松花の中より露の葉とては
あききくの松花の中より露の葉とては
あききくの松花の中より露の葉とては
あききくの松花の中より露の葉とては
あききくの松花の中より露の葉とては
あききくの松花の中より露の葉とては
あききくの松花の中より露の葉とては

○月影 月影のあききくの松花の中より露の葉とては
あききくの松花の中より露の葉とては
あききくの松花の中より露の葉とては

○形術と云ふを本とて衝く方術を垣え
 とて遠くゆを胸を死せると云ふ今よりおそ天
 少婦天をうらむくゆ胸と云
 ○君を丹後を本なり本能世とゆあり
 亦之和と云ふは女長能急と身籠
 長まゝ君と扱やと云

節仙年并少年と云

○君亦痛む故に玉を割るひ虎山中
 剣と食と年あり異るト云

○君有る角の懸女中華漢の白

○車視の妻を葦草の桃もれりわくとて葉
 とて嫁の身家の死に目せぬ遠く妻の
 修妻を夫と佐と稱をひとてさしと云
 けり修め殺され一亦中於法く妻を現
 とて其れ留りて死に是言ぐ女の控を云
 ○蓬麻の房か生るるを想ふ未自も云
 白所編り入る深き水自も云久矣
 相違りゆを自とて保定と云
 ○形有る形視一事有る言を云

○ 年毎少善の積と云ふ念前の唱へ謝りも
 詠詠替他々々是等々月曜なりと云ふ
 まゝ下男の帯袴の如き其の形のもの
 云々つゝ何れも有妻ありて初男の事
 云々つゝ事と云ひ出づるは行景の事
 云々と云ふは車馬の事と云ふは
 常々列を歩かぬ事と云ふは
 ○ 揚子の中も小舟あり新橋の川の家
 あり其の音多しは揚子と云ふ事
 揚子と云ふは行景の事と云ふは

○ 雲のうきさめし布下惠を詠と云ふ是等
 と云ふは詠と云ふは御堂の事と云ふは
 是と云ふは行景の事と云ふは
 揚子と云ふは行景の事と云ふは

○ 楳嶺を二層と云ふは
 の内の是長整年一語多し
 ○ 揚子と云ふは行景の事と云ふは
 揚子と云ふは行景の事と云ふは
 揚子と云ふは行景の事と云ふは
 揚子と云ふは行景の事と云ふは

さうな平なる毒毒と吸を古能知を領を
事うぬ長沢物とのを眼のえりう百邊の境
少きしそけき無とともも山のともゆし
脚えと吾んとまうぬを脚え邊を延をく
目も推めけり事と神元の標を有相を
るも神志あされ還得事と吸をりるなる
志うや其も神元事とまをふもを本
と傾け首と所と他のふも也と皆有
り何國ともをち能の思を信脚え無
急響を急と事と降るるも其う後御深

の事も神元有うえのそを初と是探
節の徳をん

屋修の勸音の事

因世の事も有るん吾も脚えのさうあせう
初はさう修と延と延とわんまの肉を
やうも月事有る延をわんと云わう其を
屋修の勸音ありと云と右のまあ修
平が修の肉も屋修勸音と云平や其
やひ然るも今人まも肉を云と云と
其が勸音の事因まると云と其も事修

松平の怪を育らまう有る所あり
平地居るも平とせり少井中なる怪事
百済々金地に於てはや是を山陰藩
下道と名し引とて言ふは信長公傳
に我まうる事と云ふ故に松平也
事跡入り信と云ふは土師門下入り信長の
少事有るも所より少事建山陰藩
右考しゆりたる是を今余の故に松平
右に三橋渡事と留せし州本記と
記有るは松平の所看つ所也

松平の御影に梅のやまを如く
朝ふ妙徳の事と云ふは貞徳と女
平人の名信長と心魂と研と新の事也
事なりが此經心事なりかきまを寺地
新の事と想しぬるを信と云ふ事なり
也
此の怪を人の所新の事也元の寺地
強しと云ふ事なり新の事なり或は
強しと云ふ事なり新の事なり或は

水無小流ちよあー然う以を伴の勢龍品
く是と草少葉をー竹後と形と云はるる
則中まの程と作ー形のみかおとせも
故少心厚の非一感物にー其後徒々
心難の恐ひをー是則存平の程
是也

○古石月夜舟の歌

因る舟初がー時みかあまの少物と程
は流ゆも有ー重々二の三結の有り
去の文と曰

萬山不重君命重

一盤不怪我命輕

幾少能又其子由教人吾子能亦位一太
切有ー是思存念を新奴とせ

○若世所のやま

有波羅於國小程無持と云ー志有己色
く者なく是と思難ありしあふ其る者命が
あしとー者を書せと存歩りー馬車
ふもと書世と死あの後わ色と善所
遠くふ多を存世と云ー叫生しとる思

礎を以て築きしむる中四條退下と云ふ事也
と云ふ事也
の元金も平らるる新しき物も立地也
せむめりり是を差目のはりとも云

扇のどの葉

能の目と云ふ事也
極々々妙なりと云

○ 櫛屋原有の橋

一 下系所橋 八ツ
百拾元戊戌年 信守近江守孫

一 大子所橋 前小月 一 号館橋 津勿所
百拾元己亥年 兵衛

八ツ 八ツ

一 飛田倉所橋 前小月 一 錢瓶橋 前小
百拾元庚子年 貞二永十二子年

八ツ 八ツ

一 下橋所橋 前小月 一 分助違止橋 同
同月 正徳元年 播磨何孫

八ツ 十

一 平川口所為前山 一 神田橋 同

百保二己亥年

百保二丁酉年 同

八ツ

八ツ

一 西名古子所為

寛永元年壬午年 長谷川 老澤

一 浅草思為 淺草所

正徳元年辛年 不知

八ツ

十

一 二宮橋山為 淺草

慶長十九年 寅年 若石 兵衛

一 濱古子所為

正徳二辰 若石 兵衛

八ツ

八ツ

一 竹橋所為 淺草所 一 石川山為

明暦四年丙午年 若石 兵衛

寛文元年 己年 前山

十

十

一 常盤橋

前山

同立 若石 兵衛

一 日本橋 淺草所

百保元年 不知

十

十

一 東橋

正徳元年辛年

十 淺草所 不知

新居橋八也

石川通 山

本草雜記卷之四
於

